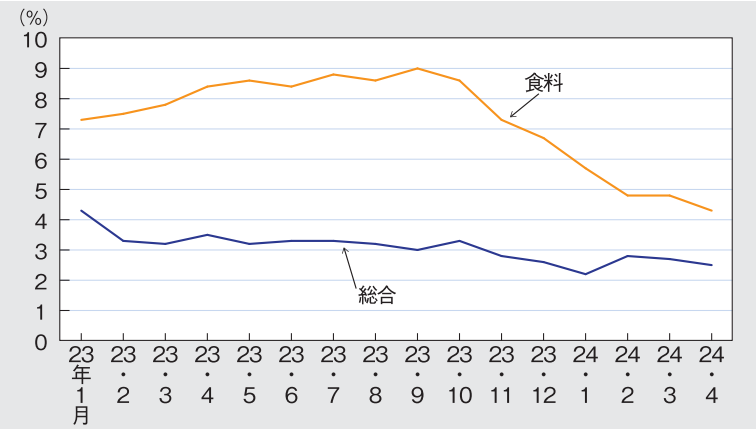
猛暑・天候不順による食品価格高騰と消費の行方

主任研究員　古江晋也

野菜の価格が高騰している。2024年４月時点の消費者物価指数（全国、第１図）によると、食料は前年同月比4.3％の増加と、徐々に落ち着きを取り戻しつつあるが、特に野菜、果物の価格高騰が著しい。原因は品目ごとによって異なるものの、全体的には「過去126年間で最も暑い夏」と言われた23年の猛暑や24年３月の冷え込みなどによる生育不良があげられる。

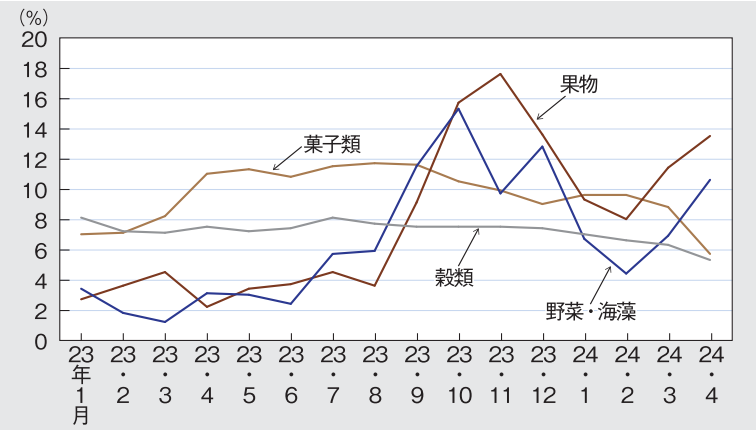
一方、家計においては、６月から定額減税が実施されたものの、政府による光熱費の補助金が５月で終了したため、電気・ガス料金の負担額が増加している。オレンジ、カカオなどの価格高騰による一部の加工食品の値上がりも出費がかさむ要因だ。向こう３か月（６～８月）の天候の見通し（24年５月21日時点）について気象庁は、平均気温が全国的に高い見込みであると発表しており、家計は今後も食品価格高騰への懸念から節約志向が強まりそうだ。

第1図　消費者物価指数（全国）の推移



資料　総務省　前年同月比

第2図　消費者物価指数（全国）の推移



資料　第1図に同じ　前年同月比

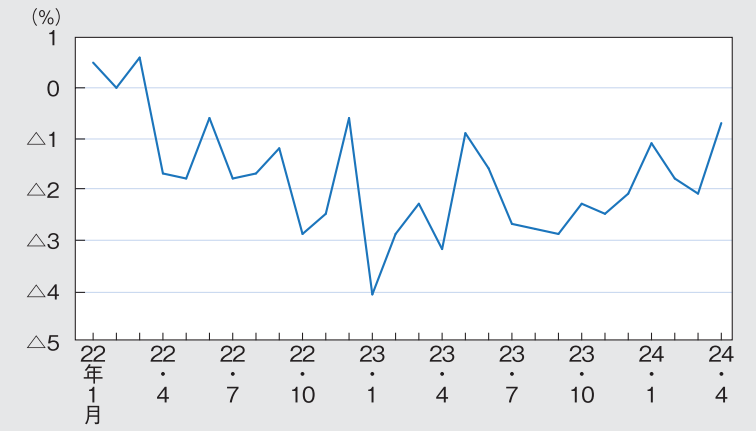
1　高騰する野菜価格

第２図は消費者物価指数（全国）の食料を構成する12のカテゴリー（中分類）のうち、上昇率が高かったカテゴリーの推移を表している。23年10月からは政府の輸入小麦の売渡価格が引き下げられたことや、値上げラッシュが一段落するようになったことなどから、食料価格は落ち着きを取り戻すようになった。しかし、野菜・海藻、果物は24年３月から価格が高騰するようになった。

個別品目では24年３月からははくさいが、４月からはキャベツ、レタス、だいこん、にんじんが高騰している。はくさいは暖冬が続いたこと、キャベツやレタスは３月に冷え込みが続いたことなどが原因であり、い

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

第3図　実質賃金指数の推移（前年比）



資料　厚生労働省「毎月勤労統計」　24年４月は速報値

ずれも天候不順による生育不良である。果物では、りんごが23年夏の酷暑などの影響によって高騰している。

米も５月以降、23年の猛暑の影響を受け、品質が低下したことから流通量が減少している。家計調査によると、家計（２人以上の世帯）における米の購入額は初めて11年にパンの購入額を下回った。ただ米の購入額は減少傾向にあっても、炊飯加工品（「パックご飯」）の需要が伸びたり、おにぎりが人気となったりするなど、米は食卓に欠かせない食材であることには変わりない。そのため、米の値上がりは家計にとって大きな負担となるであろう。

2　水温上昇による魚介類への影響

天候不順や気温の上昇は魚介類の漁獲量にも影響を与えている。例えば、最近の干しのりの価格高騰の理由の一つは、水温の上昇によってノリの摘採時期が後ずれするようになったからである。そのため、これまで行われてきた「２期作」が難しくなり、生産枚数が減少するようになった。また水温の上昇によって魚の活動が活発化したことで食害も見られるようになった。

兵庫県南部の春の風物詩であるイカナゴも近年は深刻な不漁に見舞われており、24年のシンコ漁は、播磨灘では解禁日のみで終了、大阪湾では見送りという事態となった。また大阪湾では、アナゴが伝統食材として漁獲されてきたが、水温の上昇によって漁獲量が激減している。東北地方でも高水温を受け、多くのホタテの稚貝がへい死するようになった。

猛暑や天候不順などが今後も継続的に続くことが考えられるため、一部の作物については、自治体に高温障害に強い品種の開発を要請するなどの動きもある。漁業者のなかには漁獲する魚種を変更したり、漁協のなかには蓄養事業を実施したりすることで食文化を維持する組合もある。

一方、６月に発表された毎月勤労統計調査によると、24年４月の実質賃金（速報）は前年比0.7％の減少となり、過去最長の25か月連続のマイナスとなった（第３図）。賃金が物価に追い付いていない状態が継続している。

そのため消費者は生活防衛のために相対的に価格の安い食材へとシフトすることが考えられる。冷凍食品を含めた輸入食材の購入が増加する可能性もあるが、海外でも温暖化による農産物の不作が生じている。農産物の作柄によっては、買い控えが進むことにもなりかねず、家計は夏以降も厳しい状況が続きそうである。

（ふるえ　しんや）